

実践記録

99

シリーズ

勤労青少年ホームの（青年の生涯学習対策としての）イベントの取り組みについて （中越A地区勤労青少年ホーム・スノーフェスティバルの取り組みについて）

柏崎市柏崎公民館・勤労青少年ホーム 主任 江口 和夫

・従来のイベント、講座等の傾向として事務局がお膳立てして、参加者がそこに乗るだけという傾向が多いので、今回、中越A地区の担当ホームとなったのを機会に、「主体的に企画や活動できる青年の育成」という観点で取り組んでみた。

生涯学習における青年対策という観点

かつては、柏崎市内各地の青年団体の全市的な組織として、中央公民館に事務局を置き、「柏崎市青年団体協議会」があり、その活動が華やかであった時代とは、隔世の感があります。

素朴に、なぜ同じ青年がこんなに変わったものか、という思いがするところでもあります。

どこの地区でも同じ思い（悩み？）かとは思いますが、現在の青年は何をしにかけても一番反応がなく、集まらない年代であるようです（集団活動を好まない。乗用車1台分位の人数しか集まらないとも言われている）。

現在、公民館においても、かつての青年学級講座は、開設できないような状況であり、青少年ホームで趣味講座主体のもので、青年から集まってもらっている状態です。

青年対策は「開けてはならない、開かずの扉状態」とさえいわれているところ、今回、あえて少し、こじ開けてみました。

福島県
猪苗代スキー場で



・実際の方法としては、昨年のスノーフェスティバル（担当ホームが場所を決めて、対象ホームに呼びかけて、スキー、スノボまたは、滑らない人は温泉めぐりコースという内容）の参加者7名に呼びかけたところ、5名から出席してもらい、その後3名が新規メンバーになってもらいました。

・昨年10月から12月まで6回にわたり、話し合いを続けた結果、従来の内容（場所）とはまったく違う福島磐梯方面の案が出て、これで決めました（事務局主導では出なかったかもしれない方面）。

・この間、当初の想定よりスムーズに話し合いが進行した。

イベントの成功のための三つの「もの」－（よそのもの、わかもの、ばかもの）のうち、一番大事な「ばかもの」－（そのことに、ばかになって取り組んでくれる一番大事な人）が何人も輩出し、大いに助けられました。

・開催当日が近づくにつれて、メンバーたちが「おれたちが決めた計画なんだ」というような意識がところどころに感じられたことが、大きな成果だったと思います。

・青年対策も魅力的なテーマがあれば、それを目標にして主体的に活動できるものだと感じました。

・そこで、この活動を実績にして、久しく途絶えている「利用者協議会」の復活へつなげたいねらいがありましたが、今回の中心的メンバーがホーム利用者年齢の上限に近い人が多いため、次にどのようにつなげるかが、現在思案のところではありますが、従来にない新しい実績ができたと思います。

・反省点－話の進行が当初の予想よりスムーズに行き過ぎた傾向だったため、メンバーに任せすぎたところがあり、メンバーから批判されたこともあり、前途が危ぶまれたこともありました。



夜の交流懇親会